

ルカによる福音書21章 「近づいた贖い」

1A 信仰の模範 1-4

2A 終わりの前兆 5-28

1B 惑わし 5-9

2B キリスト者の迫害 10-19

3B エルサレム包囲 20-24

4B 天変地異 25-28

3A 目を覚ました祈り 29-38

本文

ルカによる福音書 21 章から学びます。私たちは今、イエス様の最後の週の後半部分に入っています。主が宮で教えておられて、祭司長や律法学者らが、何の権威によってこれらのことをしているのかと問い質しました。むしろイエス様は、「では、バプテスマのヨハネは天から来たのか、人から来たのか。」と問い質され、彼らを答えなくさせました。そして、彼らが預言者も認めず、神の御子ご自身も殺すということを語られました。それから、納税についてカエザルはカエザルのものに、神のものは神に返しなさいと言われて、サドカイ人からは、死者の復活について、彼らの信じているモーセ五書から論証しました。

そして、イエス様はキリストについて彼らに問い質されます。キリストがダビデの子であれば、どうしてダビデはこの方を主と呼んでいるのか？と問われています。このようにして、イエス様はご自身がキリストであり、神の御子であることを示しておられるのですが、彼らは答えることができませんでした。彼らは反論することができなかったのです。であれば、受け入れればよいものを、それはしません。だから黙るしかないのです。このような人に対して、イエス様もお答えになりません。主の言葉に心を開かなければ、主は無理やりその心を押し開けることはできませんから、主も黙るしかないのです。

そしてイエス様は、弟子たちに彼らのことについて気をつけなさいという注意喚起をされます。「20:45-47 律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが好きで、また会堂の上席や宴会の上座が好きです。また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。」表向きに霊的に見せる、人々に見せるための霊性を主は問題視されています。神を恐れるのではなく、人にどう見られるのかを気にしているのです。そしてもう一つは、やもめの家を食いつぶしている、ということです。貧しい人たちの捧げる献金を、自分の私腹を肥やすために使っていたという問題です。そして、このやもめのことを取り上げて、まことの霊性、霊的であるというのはどういうことかを、教えられます。

1A 信仰の模範 1-4

21:1 さてイエスが、目を上げてご覧になると、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れていた。
21:2 また、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨二つを投げ入れているのをご覧になった。21:3
それでイエスは言われた。「わたしは真実をあなたがたに告げます。この貧しいやもめは、どの人
よりもたくさん投げ入れました。21:4 みなは、あり余る中から献金を投げ入れたのに、この女は、
乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。」

当時は、今のような福祉制度はありません。また女性が働き、報酬を得るような制度も発達して
いませんでした。したがって、未亡人になるということは乞食すれすれの生活を強いられるというこ
とです。旧約聖書だけでなく、新約聖書にも教会が、本当のやもめを助けるために聖徒たちの捧
げた金銭によって養う制度があったことを教えています。

レプタは今の通貨に換算すると、二・三百円程度のものだと思います。ここで、イエス様が人間
の常識からするとびっくりするようなことを語られます。このやもめの献金のほうが、おそらく数万
円ぐらいの価値のある金額を献金箱にいれた宗教者たちよりも、もっとたくさん入れたと言われる
のです。私たちが、目に見えるものではなく、つまり、地上によるものではなく、天を見上げて、そ
の視点から物事を見ることができるようになっているかどうか、私たちは試されています。東北に
ある教会の牧師さんが教えてくれましたが、東日本大震災の時に中国の家の教会の人たちから
の献金があったそうです。その逆は日本の物価のことを考えれば決して多額ではありませんが、
胸が詰まるほど感動したそうです。こうしたものが、天から来た富ですね。

イエス様の目による献金というのは、生活費全部を投げ打って捧げたというところ、つまり犠牲
を伴っているかどうかを見ておられます。ダビデは神殿の敷地を購入する時に、所有者のエモリ
人に金銭を支払ってその区画を購入しました。彼は、「すべて差し上げます」と言ったのですが、ダ
ビデは、「費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをささげたくありません。(2サムエル
24:24)」と答えました。私たちの救いの喜びは、こうした犠牲的行為によって表れます。

犠牲のない主への礼拝は、十字架のない救いと同じです。主は私たちを愛して、ご自分の独り
子を与えられるという犠牲をもって、その愛を示されました。したがって、私たちが神の愛の中
に留まっているためには、その愛に応答して犠牲をともなった捧げ物をする必要があるのです。主
は、私たちに地上で与えられたものを楽しむ恵みも与えられています。しかし、惜しみなく与え、その分
かち合いによっても祝福したいと願われています。受けるよりも、与えることのほうが幸いであると
主は言われました。

2A 終わりの前兆 5-28

そしてこの章の中心的内容である、イエス様の語られた、終わりの日の前兆を見ていきます。

1B 惑わし 5-9

21:5 宮がすばらしい石や奉納物で飾ってあると話していた人々があった。するとイエスはこう言われた。21:6 「あなたがたの見ているこれらの物について言えば、石がくずされずに積まれたまま残ることのない日がやって来ます。」

ルカは、貧しき者への福音を福音書において強調していますが、当時のユダヤ教の中にある世の影響、富をもって宗教を飾っている姿にも批判的視点を向けています。ここで、「宮がすばらしい石や奉納物で飾ってある」と言っていますね、しかしイエス様は、これらが「石がくずされずに積まれたまま残ることのない」と告げられるのです。ですから、まだ、金持ちたちの献金に対すること、宗教を金を貯める手段としていることへの警鐘を鳴らしています。

この宮は「第二神殿」と呼ばれますが、バビロンによって破壊されたソロモンの建てた神殿を「第一神殿」と呼びます。バビロン帰還後に、ゼルバベルとヨシュアによって建てられた神殿を第二神殿と呼びます。けれども、ヘロデがエルサレムの王となった時、彼はこの神殿の大改修を行いました。ほとんど建て直すような形でその工事を行いました。その敷地はモリヤ山の上にあります。それを平らにするための作業から始まりますが、なんと紀元前 19 年から紀元後 63 年までかかったと言われています。イエス様のおられた時にも、まだ工事は完成していなかったのです。それは、大理石で造られ、金の板が張られていました。日が差すと、その反射光が眩しくて目を向けることができないほどだったそうです。

しかし、イエス様はその廃墟となる姿を語られています。語られた約 40 年後、ローマがエルサレムを取り囲み、神殿を破壊します。火を付けると、神殿の金の飾りが溶けはじめて、そして石の割れ目の中に入っていきます。それを取り出すために、石を一つ一つ取り除いていったと言われていきます。イエス様が言われた通りになったのです。

21:7 彼らは、イエスに質問して言った。「先生。それでは、これらのことは、いつ起こるのでしょうか。これらのことが起こるときは、どんな前兆があるのでしょうか。」

イエス様になぜ、このような質問をしたかという、旧約の預言に主の到来の前にエルサレムの破壊があることを予告しているところがあるからです。「見よ。主の日が来る。「その日、あなたから分捕った物が、あなたの中で分けられる。わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。(ゼカリヤ 14:1)」それで神殿の破壊を、世の終わりと結びつけて弟子たちは質問しました。そしてイエス様が終わりの時の前兆について語られます。しかしルカによる福音書では、紀元 70 年における、このエルサレムの破壊にもっと詳しい説明をイエス様が行われたのを書き記しています。マタイの福音書にも、マルコの福音書にも、イエス様がオリーブ山で語られた、この終わりの日の徴を書きとめています。ルカも書いていますが、神殿破壊により注目しています。

21:8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大ぜい現われ、『私がそれだ。』とか『時は近づいた。』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。21:9 戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」

イエス様は、第一に「惑わされてはいけません」という注意を出されます。終わりの日について、惑わしがあるということをも、知る必要があります。終末を語る者たちによって多くの扇動が行われてきました。教会の中にもありました。私たちは気をつけないといけません。そして、自称イエスが増えます。ユダヤ人の中では第二次ユダヤ人反乱で、バル・コクバというリーダーをユダヤ人はメシヤとして持ちあげました。そして今に至るまでたくさんの偽イエス・キリストが出てきています。

そして、戦争や暴動のことも数多く出てきますが、その度に多くの人が「終わりの日ではないか」と疑います。イエス様は、こうしたものによって終わりが来たという煽りに乗ってはいけないことを教えられました。

2B キリスト者の迫害 10-19

21:10 それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、21:11 大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。」

前兆の始まりは、ここに書かれてあることです。「民族は民族に、国は国に敵対して」という言い回しですが、歴代誌第二 14 章 6 節に、「民は民に、町は町に相逆らい」という言い回しがあります。イザヤ 19 章 2 節にも、エジプトに対する預言で国中で相逆らう預言があります、これは国中で、その全域でという意味として使われています。ルカ 21 章 35 節に、「その日は、全地の表に住むすべての人に臨む」とありますが、つまり、世界の全域で敵対が起こることとしてイエス様は使っています。終わりの日の特徴は、グローバル化、世界化であります。前世紀は、二つの世界大戦によって始まりました。そして今に至るまで、世界的な規模で民族主義が起こり、互いに敵対しています。

そして大地震があります。これは前世期から幾何級数的に増加しています。人類に記録されている大地震で、イエス様の後の千年間、合計五つの地震だけだったのが、14 世紀は 157、15 世紀は 174、16 世紀は 253、17 世紀は 278、18 世紀は 640、そして 19 世紀は 2119 もの記録的地震があり、20 世紀は 90 万件を超えたのです！¹

そして疫病についてですが、私たちは「新型」と呼ばれる疫病をほぼ毎年というぐらいニュースで

¹ Fruchtenbaum, A. G. (2003). *The footsteps of the Messiah : A study of the sequence of prophetic events* (Rev. ed.) (96-97). Tustin, CA: Ariel Ministries.

見えています。さらに飢饉ですが、これだけ飽食の時代になったのに人災とも呼べるべき餓死が世界で起こっています。最近のものと、北朝鮮は 1990 年代に約三百万人が死んだと言われています。そして残りは、天からの凄まじい前兆ですが、これはまだ起こっていません。巨大な隕石が落ちてきたり、月が赤くなったりする現象はありますが、まだ先のことです。ですから、私たちはこうした終わりが来るという前兆の中に生きていると言ってよいのです。

21:12 しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕えて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。

イエス様は、「これらのすべてのことの前に」と言われています。これらの前兆の前に弟子たちは迫害を受ける、ということです。これらのことが、福音書の後、使徒の働きや書簡の中に書かれています。会堂に引き渡されるというのは、同じユダヤ人が自分を罪に定めるということです。そして牢は、ローマ当局に捕えられるということです。パウロは、カイザリヤで牢に入れられている間、ローマ総督と、ヘロデ王の前で証しをしました。

21:13 それはあなたがたのあかしをする機会となります。21:14 それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。21:15 どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。

使徒の働きは、これらのことも書き記しています。殉教したステパノは、聖霊に満たされて論破することによって、誰も反論できなかったことが書かれています。彼は殺されましたが、しかしその残した種は確実に、迫害者であるサウロ、後のパウロの心に残りました。イエス様が、すでに弟子たちに語っておられました。人を恐れず神を恐れよ、そして聖霊が証しの言葉を与えてくださる、ということです。「ルカ 12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」私たちにも、主は聖霊で満たしてください。人を恐れず、主を恐れて証しをする時に、同じようにしてください。

21:16 しかしあなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにまで裏切られます。中には殺される者もあり、21:17 わたしの名のために、みなの方に憎まれます。21:18 しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。21:19 あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。

「裏切られる」という言葉をイエス様は使われています。それは仲間としての絆がある者たちが、その絆を断ち切るからです。そして殉教者も出てきます。このことは、教会が歴史を通じて経験してきたことであり、現代にまで至っています。世界で最も迫害が酷いと言われている北朝鮮では、信者は布団を顔にかぶせて主を礼拝しています。なぜなら、家族の人に知られたら当局に知らさ

れてしまうからです。そして、「わたしの名のために、みなの方に憎まれます。」とありますが、これは驚くべきことですね。すべての良きものの初めが、私たちの主イエス・キリストです。しかし、人々はその善を嫌い、悪を愛します。したがって、光が来るとそれを憎むのです。

けれども約束があり、決して害を受けることがないということです。殉教したとしても、その後、自分に対して何もすることができません。そして、「忍耐によって」いのちを勝ち取るといっていますが、この忍耐はただ我慢するという消極的なものではなく、神の約束を積極的に信じていき、その喜びに満たされ、熱心に祈るその中での忍耐です。この世における報いよりも、後の世に来る報いを期待して生きています。

3B エルサレム包囲 20-24

21:20 しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。21:21 そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都にはいってはいけません。21:22 これは、書かれているすべてのことが成就する報復の日だからです。21:23 その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨むからです。

これは紀元後 70 年の出来事です。66 年に、カイザリヤからユダヤ人のローマへの反乱が始まりました。ローマから独立するための戦いです。けれども、ローマは戦っていき、ついに 70 年にエルサレムを包囲して、神殿を破壊します。ユダヤ人たちは、この時こそメシヤが到来してローマの力から解放してくださると信じて戦いましたが、キリスト者となったユダヤ人はそうは考えておらず、このイエス様の言葉をしっかりと心に携えていました。一時的に、ローマのエルサレム封鎖が解除された時に、彼らはほぼ全員、主の命じられたことを守り行い、ヨルダン川を越えたところにあるペラに逃げたのに、彼らはほとんど死ぬことがなかったことが、教会の指導者エウセビオスが「教会史」の中で書き記しています。

そしてそれが、「書かれているすべてのことが成就する報復の日」と主は言われていますが、これはモーセがイスラエルの民に残した預言と警告のことを指しています。イスラエルの民が主に聞き従わないために、都が包囲されて、そこで飢えで赤ん坊を食べるほどになり、主が宣言された呪いの全てが下るとい言葉の成就であります(申命 28 章)。主の怒りがご自分の民に下ったことを見ることになります。

21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

イスラエル人が敵に踏みにじられた後に、あらゆる国に連れて行かれることもモーセは預言しました。しかし、主がイスラエルの民を顧みてくださり、最後に彼らを救ってくださることを教えていま

す。このことをイエス様が語られています。エルサレムが「異邦人の時」と呼ばれるものが終わる時には、イスラエルが救われるのです。

この言葉は、私たちが今の時代を見る時に知らなければいけない大切な御言葉です。エルサレムは、紀元七十年にローマによって破壊されて以降、ビザンチン朝、イスラム勢力、十字軍、マムルク、オスマン・トルコというように、異邦人の勢力によって踏み荒らされました。そして、ユダヤ人がこの土地に少しずつ戻り始めました。そのとき、オスマン・トルコと戦ってこの地域を支配した英国が、ユダヤ人に民族郷土の約束をしたのです。そして 1948 年に、イスラエルという名で独立を果たしました。そして 1967 年に、今の神殿の丘が六日戦争の中でイスラエル軍の中に落ちました。それ以降、イスラエルの主権下の中に入ったのです。

しかし、イスラエル軍はすぐに、神殿の丘の管轄をヨルダンのムスリム宗教局に引き渡しました。したがって、治安はイスラエルが行っていますが、その中で何をするかは未だ、異邦人に任されており、ユダヤ人は何もすることができないでいます。したがって、私たちはたった今、異邦人の時が終わりそうで終わらないというニュースを見ているであり、特別な時に生きているのです。

4B 天変地異 25-28

21:25 そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、21:26 人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。21:27 そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。21:28 これらのことが起こり始めたなら、からだをまつすぐにし、頭を上になげなさい。贖いが近づいたのです。」

24 節まではこれまでおこったことですが、先に話しましたように天変地異はこれから先のことです。主の日と旧約聖書に書いてあるところは、このような天変地異を預言しています。黙示録はもっと詳しく自然界が揺り動かされることを予告しています。しかし、その時に主が地上に戻ってこられます。

その時代に生きている人々で主を信じる人々は、「贖いが近づいた」ことを知ります。贖いとは、これまで罪によって失われていたものが、神が代価を払って買い戻され、再びご自分の所有とされるということです。神はすでにキリストによって、その代価を支払われました。そして、キリストが戻ってこられる時に罪と不法に満ちるこの世を裁き、そしてこの地を刷新して、元々の姿に取り戻してくださるのです。神の国がこの地上に始まります。エルサレムに主ご自身がその王座に座られます。そして世界を統治するので、神の知識が世界に及ぶのです。

3A 目を覚ました祈り 29-38

このように、世の終わりの前兆をお語りになったイエス様は、聞いている者たちにどのように応

答すればよいか、勧めを与えられます。

21:29 それからイエスは、人々にたとえを話された。「いちじくの木や、すべての木を見なさい。
21:30 木の芽が出ると、それを見て夏の近いことがわかります。21:31 そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい。

「神の国が近いことを知りなさい。」という勧めです。神がアダムが罪を犯す前のようにして下さる、その神の国が、これらの前兆を見ることによって近いことを知るようになると言われる。いちじくの木は、私たちには馴染みが薄いですね。けれども、夏になる直前に芽を出し、七月にはその実を楽しむことができます。

21:32 まことに、あなたがたに告げます。すべてのことが起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。21:33 この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。

ここで決して過ぎ去らないものを、イエス様は約束されています。一つは、「この時代」と訳されているものです。これは、「この世代」という訳もできます。イエス様の地上におられる時代という意味ではなく、ユダヤ人は民族として決して過ぎ去ることはなく、大患難の時代に、その世代が滅びることは決してないということでもあります。「もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。(マタイ 24:22)」ですから、ユダヤ民族が今も生きており、イスラエルに住んでいるということは、あまりにも画期的なことなのです。

そしてもう一つは、「イエス様の言葉」は過ぎ去ることはありません。天地が過ぎ去っても、必ずその語られた通りになるということです。主はここで、ご自分が神からの者であることを証言されています。主が語られるのは、そのものが神の言葉であるということです。「イザヤ 55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」だから、私たちは聖書の言葉、イエス様の言葉を大切にします。この天地よりも確かなのです。

21:34 あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。21:35 その日は、全地の表に住むすべての人に臨むからです。

イエス様の次の勧めは、「よく気をつけている」ことです。放蕩や深酒に代表されるような、周囲がどうなっているのか分からなくさせる世の煩いがあります。自分だけはその活動に、はまっていますが、自分だけが気づいていません。私たちは、この終わりの日にそのような世の思い煩いに

囲まれています。主に関することを二の次にすること、主以外のものに取り組ませること、そして、いつの間にか信仰から離れ、他のことをしている状態です。本人だけは「大丈夫」だと思っ
ていますが、全然、大丈夫ではないのです。突如として破壊が襲うので、何の備えもなく滅んでしま
うのです。

最近、あるキリスト教団体の代表者の方が、私に話してくださいました。「日本のクリスチャン
の方々が、迫害に対する防災となるような状況を雑誌で提供したい。」突如として襲う地震や津波に
対して、以前から避難する方法を教えられ、用意していたら、すぐに逃げることができます。そして、
キリスト教の葬儀の会社の方ともお話ししました。仏式の葬儀などで、家族や親戚にどのように証
しを立てるのか、その時になってからでは遅すぎるという話で、「野球でも素振りが大事なんです。」
と野球を例えにしておられました。普段から、自分がクリスチャンであることを未信者に囲まれてい
る環境の中できちんと証ししているか、このような日常の積み重ねがあるからこそ、いざという時
にどのような行動を取ればよいのか、自ずと分かるということです。

「全地の表に住むすべての人」とイエス様は強調されています。つまり、この日本の国も同じです。
イエス様が語られていることが世界各地で起こっているのに、なぜか日本だけは免除されている
という幻想を抱いてしまうのが私たちです。日本という、世界で最も安全で平和な国の一つに住ん
でいますから、そう思ってしまいます。しかし、悪魔は暴れています。戦争も起こっていないのに、
毎年約三万人の人たちが自ら命を落としています。悪魔は初めから人殺しであると、イエス様は
言われましたが、それが異常ではないと思わせているのも悪魔の仕業です。まさに、麻薬やアル
コールで感覚が麻痺された状態です。日本も例外ではないということ、ここから私たちは目を覚ま
していきたいと思えます。

21:36 しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子
の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」

最後の勧めは、「いつも油断せずに祈る」ことであります。祈ることは、私たちに御霊へ抛り頼む
ことを教えてくれます。主が御霊によって、私たちに見るべきものを見せてくださいます。自分の思
いがこの世の煩いに引き寄せられていても、引き戻されることができます。

そして二つの大事な動詞があります。一つは、「逃れる」ということです。これらの患難から逃れ
ることができる、ということです。主はフィラデルフィアにある教会に、次のように約束してくださ
いました。「黙示 3:10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住
む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」ここ「試練
の時には」と訳されていますが、正確には「試練の時から」であります。したがって、試練そのもの
から守ってくださる、引き離してくださるということです。

そして、テサロニケ人への手紙では、これらの破滅、終わりの日に起こることをパウロが語った後に、こう言いました。「1テサロニケ 5:9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。」主が天から空中にまで降りて来てくださいます。キリストにあって死んだ人々がまずよみがえり、そして生き残っている私たちが一挙に引き上げられ、空中で主とお会いします。その携挙の出来事によって、後に来る患難を免れることができるのです。

そして、「人の子の前に立つ」という、「立つ」という動詞があります。主の前に立つことのできるの、やましいことがなく、責められるところもなく、そのような責めから自由にされて、主の前に行うことができるということです。私たちの前に置かれている神の御座は、さばきの御座ではなく、恵みの御座です。「ヘブル 4:16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」したがって、私たちはいつもこの恵みの御座に行くことによって、自分が神の前に立つことができるように守られます。いつも、主ご自身とその恵みに留まっていることにより、かの日にこの方が戻ってこられる時も、キリストの血によって清められている私たちは大胆に、喜んで、この方に近づくことができるのです。「ユダ 24 あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、…」

私たちが用心して、世の煩いに沈み込むことがないように、そして主の前に出る祈りを絶えず行って、自分もつばら恵みによって救われたことを感謝しながら、主が戻ってこられる時に恥ずかしくならないように祈りましょう。

21:37 さてイエスは、昼は宮で教え、夜はいつも外に出てオリブという山で過ごされた。21:38 民衆はみな朝早く起きて、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとに集まって来た。

イエス様がエルサレムに入られてから捕えられるまでの数日の間を、ルカはまとめています。民衆はイエス様の御言葉に興奮していましたが、すぐ後に十字架に付けろという怒号がイエス様に向けられます。彼らは後に、五旬節の時に「今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。(使徒 2:36)」とペテロに語られて、心が刺され、悔い改めました。主が十字架に付けられる困難な時にも、用心して目を覚ましていなければいけません。同じように終わりの日も困難になります。今のうちに、聖霊によって悔い改められる時に、心がまだ刺されるという繊細になっている時に、悔い改めて罪の赦しをいただきましょう。